The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	愛する人と自らと ： シェイクスピアのSonnetsにおける関係性のメタファー
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102475
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

愛する人と自らと：シェイクスピアの *Sonnets* における関係性のメタファー

大森文子

１．はじめに[1]

本稿は 2020～2022 年度のプロジェクト報告書掲載の筆者の論文（大森 2021, 2022, 2023）に続けて、シェイクスピアの *Sonnets* のレトリックを考察するものである。大森（2021）では、ソネット末尾の 2 行連句（カプレット）の機能の中から、特に詩の叙述内容を逆転させる機能に着目し、逆転に説得力をもたせるメタファーの働きについて考察した。大森（2022）では、*Sonnets* に描かれた〈時の翁〉（Father Time）の持ち物、その用途、愛する青年に及ぼす作用を詳細に検討した。大森（2023）では、〈時〉との関わりの中での青年に対する詩人の認識のしかたと愛情について、〈植物〉のメタファーの観点から考察し、詩に明示されない隠されたレトリックを探究した。

本稿では引き続き、美しい青年への愛を描いた 1 番から 126 番までの詩群を対象にする。本稿で特に注目したいのは、詩人すなわち語り手と青年の関係性についてのメタファーである。

本研究のきっかけとなったのは、2024 年度秋冬学期に筆者が開講した博士前期課程科目「認知レトリック論研究 B」における講義および受講生との討論であった。この授業では「英詩に学ぶ認知レトリック」をテーマに掲げ、シェイクスピアの *Sonnets* その他の詩を分析対象とした。柴田稔彦編（2004）『対訳シェイクスピア詩集』をテクストとし、受講生はその中から一つの詩を選び、詩の意味解釈、音韻的特徴を確認した上で、主として認知メタファー論の観点から詩のレトリックについて考察するという課題に答えて発表した。筆者は、受講生が発表対象として取り上げなかった詩の中からいくつかを選んで講義した。その中で、特に筆者に強い感銘を与えたのはソネット 29 番である。この詩では、自らの運命への失望、他者への嫉妬などで自己嫌悪に苛まれる語り手が、愛する青年のことを思った途端に幸福感に満たされる様子を、夜明けの雲雀（“the lark at break of day arising”）に喩えて表現している。この比喩に触発され、ソネット集で詩人（語り手）は青年との関係の中で自らをどう理解し、どのような比喩を用いているのかに興味を持った。

そこで、本研究では、154 篇のソネットのうち青年への愛を描いた 126 番までの詩を対象とし、青年と語り手の両方が比喩表現で描写されている詩を拾い上げ、二人の愛憎相半ばする複雑な関係がメタファーの観点からどのように捉えられ、表現されているのかを考察する。[2]

２．天体の神秘への畏敬と賞賛

Sonnets 中、語り手を指す 1 人称代名詞 “I” や “me” が初めて登場するのは 10 番である。この詩では、結婚を望まない青年に対し、「ああ、その態度を変えてくれ。すれば私も考えを改めよう。」(O, change thy thought, that I may change my mind: (ibid. l. 9))、「私を愛しているなら、もう一人のきみをつくってくれ、子供らや、きみのなかで、美がいつまでも生きるように。」(Make thee another self for love of me, / That beauty still may live in thine or thee. (ibid. ll. 13-14)) と訴えかける。語り手が語りの役割のみに甘んじるのではなく、詩の中の登場人物として姿を現した瞬間である。語り手は、自分が独身の青年を案じる人間であることを表明し、青年と語り手との間の愛情関係を明示する表現 “for love of me” により、語り手のキャラクター付けを明確にしている。[3]

さらに 12 番では、代名詞 “I” が 4 回登場する。語り手は、自らが何を考え、何を心配しているのかを詳細に語る。時を告げる時計の音を聞き、沈む太陽を見て (When I do count the clock that tells the time, / And see the brave day sunk in hideous night; (ibid. ll. 1-2))、また、盛りを過ぎた菫の花、白銀に変わった黒い捲き毛を見て (When I behold the violet past prime, / And sable curls all silvered o’er with white; (ibid. ll. 3-4))、さらに、落葉した高木や、白い芒（のぎ）を見せながら棺台の如き荷車に乗せられ運ばれていく農作物を見て (When lofty trees I see barren of leaves, / Which erst from heat

---

[1] 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 III」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）。

[2] 本稿で取り上げた *Sonnets* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。本稿の引用の下線部はすべて筆者による。ソネットの詩行の日本語訳（鍵括弧に入れて引用）は高松雄一訳（『ソネット集』岩波文庫、1986）による。

[3] *Sonnets* における人称代名詞の頻用、1 人称および 2 人称の所有格の繰り返しに着目した考察については、本プロジェクト報告書の渡辺秀樹名誉教授の論考を参照されたい。

did canopy the herd, / And summer's green all girded up in sheaves, / Borne on the bier with white and bristly beard: (ibid. ll. 5-8))、そこから連想を働かせ、9-12 行目では、愛する青年もやがて衰え、死に至るという末路を辿らざるを得ないことを案じるのである (Then of thy beauty do I question make, / That thou among the wastes of time must go, / Since sweets and beauties do themselves forsake, / And die as fast as they see others grow, (ibid. ll. 9-12))（12 番の詳細な分析は大森（2023）を参照）。

ただし、10 番や 12 番では、語り手は姿を見せたとはいえ、青年の身を案じ、青年に語りかける役割から抜け出してはいない。語り手が比喩によって描写の対象となり、その人物造形がより明瞭に行われるのは 14 番以降となる。

14 番では、まず冒頭で「私は占星術をこころえていると思う。」(And yet methinks I have astronomy, (Sonnet 14, l. 2)) [4]と述べ、通常の占星術のように、疫病、飢饉、季節、天候、王侯の運勢を予言することはできないが、と断った上で、9 行目以降では以下のように自らの能力を述べる。

But from thine eyes my knowledge I derive,
And, constant stars, in them I read such art
As truth and beauty shall together thrive
If from thyself to store thou wouldst convert:
Or else of thee this I prognosticate,
Thy end is truth's and beauty's doom and date. (Sonnet 14, ll. 9-14))

青年の目を恒星 (constant stars) とみなし、語り手は占星術師のように、その恒星から未来を読み解き、青年が自己愛から子孫を残すことへと転向するなら真実と美はともに栄えるであろう、さもなければ青年の死は真実と美の破滅であり終焉であろうと予言するのである。

高松（訳 1986, p. 220）は「愛する者、特にその眼を恒星にたとえるのは恋愛ソネットの慣習」であると述べる。Wilson (1966, p. 109) は、14 番が Sidney の *Astrophel and Stella* の 26 番のソネット、"Though dusty wits do scorn astrology / … / proof makes me sure, / Who oft fore-judge my after following case / By only those two stars in Stella's face" に由来するとの先行文献の存在を示し、14 番の "oft predict" (l. 7) がシドニーの "oft fore-judge" のエコーであると思われるが、シドニーが示す筋はシェイクスピアとは異なると指摘する。

確かに Wilson の指摘のとおり、シドニーはステラの目という二つの星から「自ら」の今後の運命を読み取ると述べているのに対し、シェイクスピアの 14 番は青年の目という星から「青年自身」の行く末を予言しており、予言の対象が異なる。ただし、シドニーとシェイクスピアの描写には大きな共通点があり、それは、星が人間の運命を支配すること、愛する人の目が星と同様の力を持っていることである。[5]

---

[4] 14 番では astronomy は「天文学」ではなく「占星術」の意味で用いられている。*OED* では "astronomy" の語義は 2 つ記載されている。1 番の意味は「原義：中世の大学の四学科（quadrivium：算術・音楽・幾何・天文学）の一つで、惑星や恒星の位置や運動、さらに惑星や恒星が自然現象や人事に及ぼす影響を扱う学問。後代の意味：地球大気圏外の宇宙を扱う学問。天体や地球外現象、宇宙の性質や歴史に関する研究から成る」（用例年代は c1275-）」とあり、2 番の意味として「占星術」が廃義（用例年代は c1400-1727）として示され（"†The art of astrology practised as a means of predicting human affairs. *Obsolete*."）、2 番の用例として Shakespeare の Sonnet 14 のこの箇所が引用されている。なお、現代「占星術」の意味で用いられる "astrology" は、*OED* では 1 番の意味として、14 世紀末から用いられる、中世の天文学の実用化としての占星術、すなわち、天文観測に基づき自然現象や気象現象（時間の計測、潮の満ち引きや日食の時間など）を計算、予言する自然占星術（natural astrology）、および惑星や恒星の動きを解釈して人間社会の諸事を予言、勧告する神罰占星術（judicial astrology）という語義が示され、2 番の意味として、今は廃義となった「現代の学問としての天文学」という語義（用例年代は 1656–1807）が示されている。つまり、歴史的には astronomy が「占星術」、astrology が「天文学」を指していた時期があることがわかる。

[5] シェイクスピアと同時代の Phillip Stubbes は、人間を災難へ、恥辱的な運命へ、忌わしい終焉へと引き寄せるのは悪魔の悪意であり、人間の性質の堕落であり、人間の精神の邪悪さなのであって、星ではない ("But it is the malice of the deuill, the corruption of our nature, and the wickednes of our owne harts, that draweth vs to euill, and so to shamefull deftinies, and imfamous ends, and not the starres, or planets." (Furnivall ed. (1882) Part II. p. 63)) と断じる。Knobel, E. B. (1916, p. 456) は、占星術に異を唱えるこの Stubbes の見解を引き合いに出し、シェイクスピアも同様に星が人間を支配するという占星術の信条を論破した ("Shakespeare tilted with equal frankness against the astrological principle of starry domination:") と述べ、*Julius Caesar* 1 幕 2 場の、自らの不運は星のせいではなく自らのせいだとする Cassius

星が持つ神秘的な力について、シェイクスピアは別のソネットでも描いている。

26 番では、自らの人生の旅を導く星の存在を意識し (Till whatsoever star that guides my moving / Points on me graciously with fair aspect, (Sonnet 26, ll. 9-10))、116 番では、愛とは「すべてのさまよう小舟をみちびく星なのだ」(It is the star to every wandering barque, (Sonnet 116, l. 7) と述べる。星が人生を導くほどの力をもつというこのような意識は、27 番、28 番にも暗示されている。

27 番では、くたびれて寝床に就いた語り手の心がさまよい出し、そのさまは旅する巡礼者に喩えられる (For then my thoughts (from far, where I abide) / Intend a zealous pilgrimage to thee, (Sonnet 27, ll. 5-6))。その巡礼の目的（参詣対象）である青年の姿は、寝ている語り手の目に闇夜の宝石のように浮かび上がる (Which, like a jewel (hung in ghastly night) / Makes black Night beauteous, and her old face new. (ibid. ll. 11-12))。この宝石のごとき発光体は、おそらく強い光を発する星であろう。[6]

28 番でも、昼の青年の姿は太陽に匹敵する発光体に (I tell the day to please them thou art bright, / And dost him grace when clouds do blot the heaven; (Sonnet 28, ll. 9-10))、夜の青年の姿は夕闇に輝く星に匹敵する発光体に喩えられる (So flatter I the swart-complexioned night, / When sparkling stars twire not thou gild'st the even. (ibid. ll. 11-12))。27 番、28 番に連続して描かれる発光体としての青年は、語り手にとって、「巡礼」(pilgrimage) という語が示すように、言わば信仰の対象なのである。

続く 29 番では、本稿の第 1 節でも少し触れたように、第 1、第 2 四行連句で自己嫌悪に苛まれる語り手の心情と、第 3 四行連句で愛する青年を思った瞬間の幸福感が、対照的に描かれる。

When in disgrace with fortune and men's eyes
I all alone beweep my outcast state,
And trouble deaf heaven with my bootless cries,
And look upon myself and curse my fate,
Wishing me like to one more rich in hope,
Featured like him, like him with friends possessed,
Desiring this man's art, and that man's scope,
With what I most enjoy contented least;
Yet in these thoughts myself almost despising,
Haply I think on thee, and then my state
(Like to the lark at break of day arising)
From sullen earth sings hymns at heaven's gate. (Sonnet 29, ll. 1-12)

運からも周囲からも見放された孤独な語り手の泣き声は、天には聞いてもらえない (deaf heaven (l.3))。語り手は他人への嫉妬にかられ、自らの不運を呪う。ところが 9 行目以降、青年を思った途端、語り手は幸福感に満たされる。その心情は、天の門口で賛美歌を歌う (sings hymns at heaven's gate) 夜明けの雲雀 (the lark at break of day arising) に喩えられる。不幸な泣き声と幸福の歌声という語り手の声の対照性が、聞く耳を持たない天を賛美歌を受ける天の対照性、暗く陰鬱な夜の大地と明るい夜明けの空の対照性と平行して描かれる。その中で、昇る太陽に向かって歌う雲雀の声のごとき語り手の歌声は、神にささげる賛美歌 (hymn) となる。これは〈語り手は雲雀であり信者、青年は昇る太陽であり神〉というメタファーに基づく表現だと言える。27 番における pilgrimage と同様、hymn という表現には、青年を神格化する態度が現れている。

以上のように、14 番、27 番、28 番、29 番では、青年は星すなわち闇に輝く発光体、あるいはあたりを明るく照らす太陽に喩えられ、天体に匹敵するその魅力を神格化し憧れる、信仰心にも

の台詞、さらに *King Lear* 1 幕 2 場の、自分の行動を棚に上げて運勢の傾きを星のせいにする考え方を皮肉たっぷりに非難する Edmund の台詞を引用する。確かに Cassius や Edmund の発言は、シェイクスピアが伝統的占星術にとらわれない考え方を持っていたことをうかがわせる。ただし少なくとも 14 番のソネットにおける比喩は、占星術が前提とする星の影響力に関する当時の伝統的な文化モデルに基づく表現であると言える。なお、Knobel, E. B. (1916) の論考については渡辺秀樹名誉教授よりご教示いただいた。ここに記して御礼申し上げたい。

[6] *OED* "jewel" *n*. の比喩義 II.5.b. Something likened to a jewel in terms of its appearance, esp. in being brightly coloured or having a brilliant sheen. について、Shakespeare の例は記載されていないが、初例 1595 Thine eye (the bodies Iewell in some kinde). (B. Barnes, *Divine Centurie of Spirituall Sonnets* lxxxi. sig. F4) および第 2 例 1702 One of her Black Brilliant Eyes is worth a Diamond as big as her head. I compar'd her Necklace with her looks, and the living Jewels out-sparkel'd the dead ones by a Million. (G. Farquhar, *Inconstant* v. 88) に輝く目の描写が引用されている。

似た気持ちが表現されている。43 番でも 27 番と同様に、夢に見る青年の姿が暗闇を明るく照らし、眠りの中でそれを見る語り手は、昼間に太陽より明るい光を放つのを見る幸せな様を夢想する (Then thou, whose shadow shadows doth make bright, / How would thy shadow's form form happy show, / To the clear day with thy much clearer light, / When to unseeing eyes thy shade shines so? (Sonnet 43, ll. 5-8))。ここでは、青年が放つ光は、星よりも、また太陽よりも明るい光として想像されている。

これらの詩で描かれる語り手と青年の関係を表すメタファー対応関係を表 1 に示す。青年は光を放つ天体の観点から理解され、それを見つめる語り手の喩えは様々に異なるが、いずれも、天体の神秘的な力への畏敬の念を持つ点が共通している。

表 1　〈天体との関わり〉から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	14 番	**27 番**	**28 番**	**29 番**	**43 番**
語り手	占星術師	巡礼者	旅人	雲雀	眠る人
青年	恒星	暗闇の宝石 （の如き星）	昼の発光体（≒太陽） 夜の発光体（≒星）	明け方の太陽	夜の発光体（＞星） 昼の発光体（＞太陽）

３．裏切りへの非難と宥恕

33 番からは、それまでと一転、詩の表現には青年に対する失望の色合いが加わって来る。

Even so my sun one early morn did shine
With all triumphant splendor on my brow;
But out alack, he was but one hour mine,
The region cloud hath masked him from me now.　(Sonnet 33, ll. 9-12)

Why didst thou promise such a beauteous day,
And make me travel forth without my cloak,
To let base clouds o'ertake me in my way,
Hiding thy brav'ry in their rotten smoke?
'Tis not enough that through the cloud thou break
To dry the rain on my storm-beaten face,　(Sonnet 34, ll. 1-6)

33 番では青年を、雲の陰に隠れ、輝きを失う太陽、34 番では黒雲に隠れて嵐の後に現れる太陽に喩え、青年の裏切りを非難する。33 番では、「私の太陽」との喩えで描く青年がわがものであったのは一時間に過ぎないという 11 行目の表現、34 番では、嵐の後に雲の陰から現れて、旅をする語り手の顔の雨水を乾かすのでは十分とは言えないのだという 5-6 行目の表現からは、裏切られてもなお青年を太陽に喩えて崇めようとする気持ちと、自らは青年に裏切られた被害者だという悲嘆と非難の気持ちが絡み合った語り手の複雑な心情が現れている（33 番、34 番のメタファーについての詳細な考察は、大森 2018a および大森 2018b を参照されたい）。

続く 35 番では、冒頭に、雲や食によって翳る太陽の描写 (Clouds and eclipses stain both moon and sun, (Sonnet 35, l. 3)) があるものの、もはや太陽を崇める気持ちは影を潜め、青年の悪行を指す語句を "thy trespass" (l. 6)、"thy amiss" (l. 7)、"thy sins" を 2 回 (l. 8)、"thy sensual fault" (l. 9) と畳みかける（"thy" の繰り返しの意義と効果については、本プロジェクトの渡辺秀樹名誉教授の論文を参照されたい）。同時に、語り手自身はその罪をことさらに弁護し (Excusing thy sins more than thy sins are: (l. 8))、自分自身を相手に訴訟を起こし (And 'gainst myself a lawful plea commence: (l. 11))、「私からむごくも奪いとるやさしい盗人がいれば、私はその共犯者にならずにはいられない。」(That I an accessary needs must be / To that sweet thief which sourly robs from me. (ll. 13-14)) という法廷用語を用いたメタファーで、青年への愛憎相半ばする苦しい感情を吐露する。

40 番でも、青年の「官能の罪」を非難する 35 番と同様、青年を「盗人」呼ばわりし、しかもその罪を許すという態度を見せる。

I do forgive thy robb'ry, gentle thief,
Although thou steal thee all my poverty;
And yet love knows it is a greater grief

To bear love's wrong than hate's known injury.　(Sonnet 40, ll. 9-12)

青年を指す "thief" という語に、35 番では "sweet"（14 行目）、40 番では "gentle"（9 行目）という修飾語句を共起させているという措辞に、語り手の青年への複雑な感情が見て取れる。

さらに 93 番では、語り手は自らを、青年の真実を信じて生きる「寝とられ亭主」(deceivèd husband) に喩え、青年を、表面的には語り手を愛しているように見えてもほんとうは心変わりしている不実な妻のように描く (So shall I live, supposing thou art true, / Like a deceivèd husband, so love's face / May still seem love to me, though altered new: (Sonnet 93, ll. 1-3))。そして、青年の美しさをイヴの林檎に喩える (How like Eve's apple doth thy beauty grow, (ibid. l. 13))。Booth (1977, p. 305) は、『創世記』第 3 章に由来する "Eve's apple" の「外見が人を欺く」という意味に着目しつつ、アダムとイヴの物語が、2 行目の "deceivèd husband" や 9 行目の "heaven in thy creation" により構成される文脈と関連を有することを指摘している。罪を犯した青年はもはや神格化されず、神に造られ裏切りの罪を犯す象徴的存在としてのイヴという人間に格下げされてしまっている。

以上の一群の詩に見られる、青年を翳る太陽や罪人として捉え、その罪をなじりながらも許そうとする複雑な語り手の心情を表すメタファーを表２にまとめる。

表 2　〈翳る太陽／罪人への非難と許し〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	33 番	34 番	35 番	40 番	93 番
語り手	被害者	被害者	被害者であり共犯者	窃盗犯を許す被害者	寝取られ亭主
青年	翳る太陽	黒雲に隠れ嵐の後に現れる太陽	窃盗犯	窃盗犯	不実な妻、イヴ

４．財宝を守り、楽しみ、失うことに怯える

詩群の中には青年を財産、財宝と捉えるメタファーも見られる。前節で観察したように、青年を窃盗犯呼ばわりする 35 番では法廷用語が頻出したが、それに先立ち 30 番でも法廷用語が登場する。ただし、30 番で描かれるのは「やさしい静寂にひたされた」心の法廷 (the sessions of sweet silent thought (Sonnet 30. l. 1)) である。語り手はそこに過去の思い出の数々を召喚 (summon up (ibid. l. 2)) し、人生が空しく過ぎたことを嘆く (wail my dear time's waste (ibid. l. 4))。Ingram and Redpath eds. (1964, p. 74) は、このソネットにおける措辞は荘園裁判所（manorial court）で荘園の領主あるいは執事（the Lord of the Manor, or his steward）が地所の収支欠損状況（the condition of the estate, its losses and resources）を調べている様子になぞらえていると指摘する。

Then can I drown an eye (unused to flow)
For precious friends hid in death's dateless night,
And weep afresh love's long-since-<u>cancelled</u> woe,
And moan th' <u>expense</u> of many a vanished sight;
Then can I grieve at grievances fore-gone,
And heavily from woe to woe <u>tell o'er</u>
The sad <u>account</u> of fore-bemoanèd moan,
Which I new <u>pay</u> as if not <u>paid</u> before.
　But if the while I think on thee (dear friend)
　<u>All losses are restored</u>, and sorrows end.　(Sonnet 30, ll. 5-14)

語り手は、死別した友人たちを偲び、その喪失を「帳簿からの抹消」(cancelled)、「損失」(expense) と捉え、11-12 行目では「すでになげきおえた嘆きをさびしく清算して、支払いがすんでいるのに、あらためて払いなおす。」と会計用語を重ねながら述べる。そして 13-14 行目では、そんなときに青年を思うと「すべての損失は埋めあわされ、悲しみがおわるのだ。」と心が休まる様子を描く。大切な友人たちとの死別の悲しみを、荘園領主にとっての財産の損失と捉え、青年を、損失を埋め合わせる財産と捉えていることがわかる（30 番については大森（2018a）の考察も参照）。

52 番で描かれるように、資産家にとって、大事な財宝を金庫に保管し、時折鍵を開けてそれを眺めるのは喜びである (So am I as the rich, whose blessèd key / Can bring him to his sweet up-lockèd treasure, (Sonnet 52, ll. 1-2))。一方、不安なのは財産を盗まれることである。その不安に怯える様子

が 48 番では描かれる（48 番のメタファーについては大森（2018a）の考察も参照）。

But thou, to whom my jewels trifles are,
Most worthy of comfort, now my greatest grief,
Thou best of dearest, and mine only care,
Art left the prey of every vulgar thief.
Thee have I not locked up in any chest,
Save where thou art not, though I feel thou art,
Within the gentle closure of my breast,
From whence at pleasure thou mayst come and part;
And even thence thou wilt be stol'n, I fear:
For truth proves thievish for a prize so dear. (Sonnet 48, ll. 5-14)

語り手は 5 行目で、青年を自らが所有する宝石を上回る財産として捉え、7 行目で最も高い資産価値をもつものであり「唯一の悩みの種」だとする。[7]「そこいらの泥棒風情が狙うままにし」（8 行目）、「きみを箱にいれて鍵をかけてはおかなかった」（9 行目）と財産管理の無防備さを反省し、その結果青年を盗まれる可能性を怖れる（13 行目）。

同様の不安は 75 番でも描かれる。語り手は自らをけちな資産家になぞらえ、自分の資産である青年を自慢するかと思えば「こそ泥みたいな世間に宝を盗まれるのでは、と怖れ」る様子を描く (And for the peace of you I hold such strife / As 'twixt a miser and his wealth is found: / Now proud as an enjoyer, and anon / Doubting the filching age will steal his treasure, (Sonnet 75, ll. 3-6))。

一方、65 番では、財宝を奪っていくのは泥棒ではなく、時である。

O fearful meditation; where, alack,
Shall Time's best jewel from Time's chest lie hid?
Or what strong hand can hold his swift foot back,
Or who his spoil of beauty can forbid? (Sonnet 65, ll. 9-12)

ここでは、青年の喩えとなっている「宝石」(jewel) の真の持ち主は語り手ではなく、〈時〉である。美しい青年の命を〈時〉に返すことなく隠しておく（10 行目）のは不可能で、そのことを思って語り手は恐怖にかられている。この恐怖心は、私たち人間はこの命を一定時間割り当てられているに過ぎないという文化モデル（Lakoff and Turner 1989, pp. 34-35 参照）と深い関連を有する。

87 番では、さらに悲観的になり、冒頭で語り手は青年を、自分が所有するにはあまりに貴重だとして別れを告げる (Farewell, thou art too dear for my possessing, (Sonnet 87, l. 1)) 。[8] 青年を所有する契約の期限が切れてしまい (My bonds in thee are all determinate. (ibid. l. 4))、独占的所有権を返さねばならない (And so my patent back again is swerving. (ibid. l. 8)) と、高価な財産の所有契約の期限切れの観点から青年との関係の終焉を捉える。これまで青年を所有していたと思っていたのは夢だったとし、夢の中で自分は王だったのだと嘆く (Thus have I had thee, as a dream doth flatter: / In sleep a king, but waking no such matter. (ibid. ll. 13-14))。この 14 行目について、大場（編注訳 2018、p. 193）は「あわれ一炊の王者、覚めれば元の木阿弥。」という印象的な意訳を提示している。

上記の一連の詩群におけるメタファーを、表 3 にまとめる。

---

[7] "care" には「関心、心配」といった現代義のみならず、「悲しみ」という古義がある (*OED* "care" 1. † 1.a. Mental suffering, sorrow, grief, trouble. *Obsolete*. (Old English–1720))。Sonnet 48, l. 7 の "care" の解釈は注釈者によって異なる。Duncan-Jones (1997, p. 48) は "responsibility, source of anxiety" と解釈し、Schmidt (1971) は "care" の語義として 1) grief, sorrow, 2) anxious concern, solicitude, 3) watchful regard and attention の 3 つを挙げた上で、Sonnet 48, l. 7 の "care" は 3) に属するとしている。Booth (1977, p. 211) は "*mine only care* (1) my only grief; (2) my only concern (with a play on Latin *carus*, "dear": "my only beloved," "the only thing I care about" --compare Italian *cara mia*)" との注釈を付けている。このような解釈の揺れは、すなわち care の多義性を表していると言える。その意味では、多義を示しながら古義を取り入れた Booth の解釈が、1 行前（6 行目）の "grief" とも響き合っており、詩人の意図に最も近いのではないかと思われる。

[8] Wilson (1966, p. 191) は、87 番から 94 番までの詩群を "Farewell Sonnets" と名付けている。

表 3 〈財産の所有と管理〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	30 番	48 番	52 番	65 番	75 番	87 番
語り手	裁判で収支を調べる領主	財宝の盗難を怖れる資産家	財宝を時折見て楽しむ資産家	時から宝石を借りている人	財宝の盗難を怖れる資産家	夢の中の王
青年	損失を埋め合わせる財産	盗まれる危険のある財宝	金庫に保管した財宝	時の最上の宝石	盗まれる危険のある財宝	夢の中の財宝

表 3 にまとめた〈財産を所有・管理する資産家〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファーとの関連で、青年を〈絵画作品〉に喩えるメタファーについても観察しておきたい。

24 番では、語り手の目が画家で、語り手の心が画布に喩えられ (Mine eye hath played the painter and hath stelled / Thy beauty's form in table of my heart; (Sonnet 24, ll. 1-2))、語り手の体が絵を支える枠組みして捉えられている (My body is the frame wherein 'tis held, (ibid. l. 3))。目が描いた絵としての青年を心の中に宿している語り手の愛情が描かれている。

46 番では、24 番での目と心の協力態勢から一転、絵を巡って目と心が戦う様が描かれる。[9]

Mine eye and heart are at a mortal war
How to divide the conquest of thy sight.
Mine eye my heart thy picture's sight would bar;
My heart, mine eye the freedom of that right. (Sonnet 46, ll. 1-4)

ここで注目したいのは、青年の絵姿が戦利品として描かれていることである[10]。第 3 節で観察したように、33 番以降、青年の裏切りで手痛い精神的打撃を被った語り手にとって、青年との人間関係は決して平穏無事が保証されたものではなく、青年の愛は勝ち取り、獲得したもの (conquest) である。それを語り手は戦利品としての絵画作品に喩え、その絵画をめぐって自らの目と心が争う様を描く。一方、47 番では、争っていた目と心の間に条約が結ばれ、目と心が互いに助け合い、その絵画を正餐として目が心を招待して饗宴を開く様子が描かれる (With my love's picture then my eye doth feast, / And to the painted banquet bids my heart. (Sonnet 47, ll. 5-6))。46 番、47 番の詩を経て、上述した 48 番の財宝のソネットへと続くことから、この絵画作品は資産価値の高い財産として捉えられていることがわかる（47 番のソネットの考察については大森（2018a）も参照されたい）。

以上の 24 番、46 番、47 番に見られる〈絵画作品の所有と管理〉の観点から語り手の青年への愛を捉えるメタファーの対応関係について、表 4 にまとめる。

表 4 〈絵画作品の所有と管理〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	24 番	46 番	47 番
語り手	目が画家、心が画布	絵をめぐって争う目と心	絵をめぐって条約を結んだ目と心
青年	語り手の心の中の絵	戦利品としての絵	戦利品としての絵

５．植物としての命を刈り取る〈時〉への抵抗

第 2 節で観察したように、14 番では、語り手は青年の目を神秘的な力を有する星の観点から捉え、占星術師のように青年の運命を占っていた。その 14 番を受け、次の 15 番では、語り手は人間の性質や運命に影響を及ぼす星の力 (secret influence)[11] と対比させて生きとし生ける者の命の短さ、はかなさに思いを馳せ (When I consider every thing that grows / Holds in perfection but a little moment; / That this huge stage presenteth naught but shows, / Whereon the stars in secret influence comment;

[9] Booth (1977, p. 208) は、目と心の争いはルネサンス期の恋愛詩でしばしば描かれると指摘している。

[10] Wilson (1966, p. 151) は "the conquest" を (a) the spoils of war; (b) property of goods awarded in a legal action の多義として解釈している。川西 (1971, p. 108)、大場 (2018, pp. 106-107) は「戦利品」と訳している。

[11] *OED* には "influence" の占星術関連の語義（初例 c1374）が記載されている (influence, *n*. 2.a. *spec. in Astrology*. The supposed flowing or streaming from the stars or heavens of an etherial fluid acting upon the character and destiny of men, and affecting sublunary things generally. In later times gradually viewed less literally, as an exercise of power or 'virtue', or of an occult force, and in late use chiefly a poetical or humorous reflex of earlier notions.)。

(Sonnet 15, ll. 1-4))、人間は植物だというメタファー認識 (MEN AS PLANTS) を言葉に表す。

When I perceive that men as plants increase,
Cheerèd and checked even by the selfsame sky,
Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
And wear their brave state out of memory;
Then the conceit of this inconstant stay
Sets you most rich in youth before my sight,
Where wasteful time debateth with decay
To change your day of youth to sullied night,
And, all in war with Time for love of you,
As he takes from you, I engraft you new. (Sonnet 15, ll. 5-14)

語り手が認識する人間は、植物とまったく同じで、「おなじひとつの空のもとではぐくまれもし抑えられもして、繁殖し、若々しい生気をほこり、絶頂に達して、おとろえ、やがては、はなやかな装いも忘れられる」(5-8 行目）という運命をたどる。その若い頃の生気を表す "youthful sap" という語は、樹液が枝を豊かに巡り、青葉若葉の瑞々しい樹木を連想させる。その若木のような青年の末路を思い、語り手は愛する青年を奪っていく時の神と戦い、青年に接木を施す (engraft) のである（15 番のソネットのレトリックについては、大森（2023）も参照されたい)。

同様の表現は 37 番にも見られる。青年の優れた資質として、美、生まれ、富、知恵を挙げる語り手は、「この豊饒な徳の宝に、私はわが愛を接木するのだ。」と宣言する (For whether beauty, birth, or wealth, or wit, / Or any of these all, or all, or more, / Entitled in thy parts do crownèd sit, / I make my love engrafted to this store. (Sonnet 37, ll. 5-8))。

15 番、37 番の「接木する」(engraft) という表現から連想するに相応しい植物は、詩の中では特定されていないので、接木という栽培技法が有効な樹木であればいずれを想定してもよいが、典型的にはおそらく薔薇であろう。美しい青年を「美の薔薇」(beauty's rose) になぞらえたソネット 1 番に始まり、このソネット集では青年の喩えとして用いられた植物のうち最も多いのが薔薇だからである（大森 2023、p. 2 参照)。「接木する」という行動からは、薔薇を接木し、丹精込めて育てる園芸家としての語り手の姿が連想される。愛をこめて青年を描き、「人が息をし、眼が見うるかぎり、この詩は生きる。そして、この詩がきみにいのちをあたえる。」(So long as men can breathe or eyes can see, / So long lives this, and this gives life to thee. (Sonnet 18, ll. 13-14)) と強い決意で詩作に臨む詩人にとって、〈詩人は園芸家、詩作は（薔薇の）園芸〉なのである。

さらに、青年の限りある命を継続させる試みを、香水製造の観点から捉える詩もある。5 番では、美しい姿がやがて時の仕業で台無しにされてしまうことを嘆きつつ、「でも、花を蒸溜しておけば、たとえ冬にめぐりあっても失うのは見かけだけ、実体はとわに芳しく生きる」(But flowers distilled, though they with winter meet, / Lose but their show; their substance still lives sweet. (Sonnet 5, ll. 13-14)) とし、6 番では「だから、冬のあらくれた手がきみの夏を醜いすがたに変えるまえに、ご自分を蒸溜してしまいなさい」(Then let not winter's ragged hand deface / In thee thy summer ere thou be distilled: (Sonnet 6, ll. 1-2)) と青年に勧めるが、54 番では語り手自らが香水の製造をかって出る。

Of their sweet deaths are sweetest odours made:
And so of you, beauteous and lovely youth:
When that shall vade, by verse distills your truth. (Sonnet 54, ll. 12-14)

かぐわしい薔薇の香水は馥郁たる薔薇の死骸から作られるとし、青年の美しさが色あせても、語り手が作る詩によって青年の真実が蒸溜され滴り出るのだと述べる。詩人の詩の力で青年の美を香水のごとく残そうとする意志がここには表されている。

以上の詩に見られる、命に限りがある植物に接木をしたり香水を製造したりするように青年の限りある命を詩の力で継続させようとする語り手のメタファーを表５にまとめる。

表 5 〈植物の限りある命の継続の試み〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	15 番	37 番	54 番
語り手	接木をする園芸家	接木をする園芸家	香水製造者
青年	植物	植物	薔薇

６．従者の卑屈と矜持

以上のように、語り手は青年を〈天体〉、〈罪人〉、〈財宝〉、〈植物〉といった様々なものに喩え、それらとの関わりのメタファーによって青年への愛を捉えてきたが、57 番からの近接する 4 つの詩では、君主ないし貴人に奉仕する者の観点から青年への愛が語られる。この観点は、遡って 26 番にその萌芽が見られる。26 番では、「わが愛の君主よ、きみの人柄がりっぱだから、私も臣下の礼をとり、心からなる忠誠をささげている。」(Lord of my love, to whom in vassalage / Thy merit hath my duty strongly knit, (Sonnet 26, ll. 1-2)) と、語り手を君主に忠誠を捧げる臣下として描いている。

一方、57 番では、語り手は自身を青年に仕える奴隷に喩える (Being your slave, what should I do but tend / Upon the hours and times of your desire? (Sonnet 57, ll. 1-2))。

Nor dare I chide the world-without-end hour
Whilst I (my sovereign) watch the clock for you,
Nor think the bitterness of absence sour
When you have bid your servant once adieu.
Nor dare I question with my jealous thought
Where you may be, or your affairs suppose,
But like a sad slave stay and think of naught,
Save where you are how happy you make those. (Sonnet 57, ll. 5-12)

語り手は青年に「わが王よ」（my sovereign）と呼びかけ、自らを “slave” や “servant” と位置づけるが、この君主は語り手を放置し、時計とにらめっこをさせる。その長く辛い留守居の時間を、語り手は非難も（chide）しないし、苦痛（bitterness）にも思わない、青年の行き先を疑い深く[12]（with my jealous thought）聞きただし（question）たりもしない、と否定文を重ねてはいるが、実際の気持ちはその裏返しであることは “the world-without-end hour” や “absence sour” や “sad slave” といった表現から明らかである。すなわちここには、表面的には否定しながら実は暗に肯定する「陽否陰述」（apophasis）のレトリックが見られる。[13] “servant” について、Ingram and Redpath eds. (1964, p. 134) はエリザベス朝の英語特有の意味として、(1) slave と (2) lover の両義を指摘する。57 番の “servant” には、lover ならではの満たされない鬱屈した思いが含意されているように見受けられる。語り手は青年との関係を従者の無私の献身の観点から表現してはいるが、青年が自分以外の人たちを楽しませている（how happy you make those）ことへの悲しみ、悔しさを滲ませている。

58 番でも、語り手は自身を青年の「奴隷」(your slave (Sonnet 58, l. 1))、「きみの御意のままにはべる従僕」(your vassal bound to stay your leisure (ibid. l. 4)) と述べ、青年を、自分の時間を自由に使う権利、自分の罪をも自分で許す資格といった王者の如き強大な特権をもつ者とみなす (Be where you list, your charter is so strong / That you yourself may privilege your time / To what you will: to you it doth belong / Yourself to pardon of self-doing crime. (ibid. ll. 9-12))。自由気ままに羽を伸ばす青年に置き去りにされた状態を牢獄への拘留に (Th' imprisoned absence of your liberty (ibid. l. 6))、あるいは地獄に喩え、(I am to wait, though waiting so be hell, (ibid. l. 13)) 青年を待つ苦しみを訴えかける。

61 番では、語り手は青年に会えずに眠れぬ夜を過ごし、目蓋に青年の幻影がちらつく理由を自問したあげく、「私を目覚めさせておくのはこの私の愛なのだよ。私のこの真実の愛が、私の安息をぶちこわし、きみのために夜警の役をつとめているのだ。」(It is my love that keeps mine eye awake, / Mine own true love that doth my rest defeat, / To play the watchman ever for thy sake. (Sonnet 61, ll. 10-12)) と答を出す。“watchman” からは、青年を警護対象の貴人とみなす捉え方がうかがえる。

---

[12] Schmidt (1971, Vol. I, p. 603) は “jealous” の 2 番目の意味 “suspicious in any way” の用例のひとつに Sonnet 57 のこの箇所を挙げている。

[13] 「陽否陰述」（apophasis）については渡辺秀樹名誉教授よりご教示を得た。

63 番では、青年を何から警護したいのかが明確に示される。「時の神の邪悪な手」である。

Against my love shall be as I am now,
With Time's injurious hand crushed and o'er-worn,
When hours have drained his blood and filled his brow
With lines and wrinkles, when his youthful morn
Hath travelled on to age's steepy night,
And all those beauties whereof now he's king
Are vanishing, or vanished out of sight,
Stealing away the treasure of his spring:
For such a time do I now fortify
Against confounding age's cruel knife,
That he shall never cut from memory
My sweet love's beauty, though my lover's life.
His beauty shall in these black lines be seen,
And they shall live, and he in them, still green. (Sonnet 63)

時の神は、王（king）のごとき青年を押しつぶし、その若さと美を奪っていく。その無残な刃（cruel knife）に備えて、語り手は守りを固め（fortify）、時の神が青年の美を人の記憶から切り離す（cut）のを防ごうとする（シェイクスピアが描く時の手の悪行についての考察は大森（2022）を参照）。王を守る護衛のようなその覚悟は、語り手の詩行（these black lines）により実践される。

このように、57 番や 58 番で、青年の自由奔放な振舞いに恨み言を並べながら卑屈に隷従していただけの語り手は、63 番に至り、詩人としての矜持を取り戻し、ペンという武器で時の神に立ち向かい、君主たる青年を守ろうとする。青年と語り手を主従関係の観点から捉えたこれらの詩群におけるメタファーからは、従者としての語り手の心情の変化が読み取れる（表 6 参照）。

表 6 〈君主に仕える下僕〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	26 番	**57 番**	**58 番**	**61 番**	**63 番**
語り手	忠誠を捧げる臣下	君主に置き去りにされる奴隷	君主に置き去りにされる奴隷	夜警	君主を守り時の神と戦う護衛
青年	君主	自由奔放な君主	自由奔放な君主	警護対象者	時の神から危害を受ける君主

7．畏敬と信仰

ソネット 1 番から 126 番までの、青年への愛を語る詩群の終盤にさしかかり、語り手は自らの心を静かに振り返る。そこで浮かび上がる青年への思いは、信仰心とも言える気持ちである。

108 番では、語り手がこれまで書き連ねてきた詩の中で、自らの真心について書き残したことがあるのか、他に目新しいことが語れるのかと自問した上で、何もないと自答する。

Nothing, sweet boy; but yet, like prayers divine,
I must each day say o'er the very same,
Counting no old thing old, thou mine, I thine,
Even as when first I hallowed thy fair name. (Sonnet 108, ll. 5-8)

「日ごと、一つことを繰り返すほかはない」と語る語り手は、その詩作態度を神への祈り（prayers divine）になぞらえる。Burrow ed. (2002, p. 596) は、7 行目の「汝はわがもの、我はながもの」(thou mine, I thine) という文言が旧約聖書の「ソロモンの雅歌」2 章 16 節の "My beloved is mine, and I am his." のエコーであること、8 行目の「きみの美わしい名を崇めた」(hallowed thy fair name) が「マタイによる福音書」6 章 9 節の主の祈りの一節、"Our Father which art in heaven, hallowed be thy name" の引喩であることを指摘する（Ingram and Redpath eds. 1964, p. 250 も参照）。語り手は聖書由来の表現を用いて、青年が神に匹敵する聖性をもつという認識を表現していると言える。

110 番では、語り手は自身のこれまでの愚行を反省し、2 行目で自らを "motley" と卑下する。Schmidt (1976, Vol. 1, p. 744) はこの語の 2 つの意味、1) the particoloured dress of domestic fools or

jesters と 2) a fool を指摘し、2 番目の意味の用例のひとつにソネット 110 番を挙げている。高松（訳）（1986, p. 152）が示した「だんだら染めの道化」という訳は、この 2 つの意味の両方を生かした、イメージ喚起力の高い訳である。一方で、愛する青年に対しては、12 行目で「神」と呼びかけ、自らの信仰心が青年ひとりに向けられることを明言し (A god in love, to whom I am confined. (Sonnet 110, l. 12))、青年を「清らかな、いとも、いとも、やさしい胸」の持ち主として描く (thy pure and most most loving breast (ibid. l. 14))。

108 番や 110 番に見られる青年への宗教的とも言える愛情については、遠く遡って第 2 節で観察した 27 番や 29 番にも、その萌芽とも思える表現が見られた。"pilgrimage" (Sonnet 27, l. 6) および "hymn" (Sonnet 29, l. 12) という語の使用である。しかし、その心情の喩えとなっていた天体への信仰心は、後に青年の裏切りを受けて、翳る太陽に対する非難へと変化してしまうので（第 3 節参照）、真の信仰心ではなかったと言える。一方、宗教心の萌芽として注目すべきは 31 番である。この詩では "religious" という語が *Sonnets* の中で唯一使用されている。

How many a holy and obsequious tear
Hath dear religious love stol'n from mine eye,
As interest of the dead, which now appear
But things removed that hidden in thee lie?
Thou art the grave where buried love doth live,
Hung with the trophies of my lovers gone,
Who all their parts of me to thee did give;
That due of many, now is thine alone. (Sonnet 31, ll. 5-12)

語り手は、死んだ友人たちの心がすべて青年の胸に納められているものと見なしている。敬虔な愛の心 (religious love) で、語り手はひたむきに死者を悼む (obsequious) 神聖な (holy) 涙を流すが、語り手が愛したその死者たちの姿が、青年の中に見える (Their images I loved I view in thee, (ibid. ll. 13))。語り手にとって、青年は「埋葬された愛が生きている墓」（9 行目）だという表現からは、死者への宗教的心情を包含して青年へ敬虔な愛を傾けている語り手の心情がうかがえる。

このようにソネット集の序盤で見られた宗教心の萌芽が、終盤の 108 番や 110 番における〈神〉の概念の明示によって花開くのだが、125 番では、語り手はついに、青年の外観を賛美し顔や形に拘ることの愚かさを悟り（1-8 行目）、青年の内面をこそ讃えるべきだという心境にたどり着く。

No, let me be obsequious in thy heart,
And take thou my oblation, poor but free,
Which is not mixed with seconds, knows no art,
But mutual render, only me for thee. (Sonnet 125, ll. 9-12)

9-10 行目の「いや、私はきみの心に忠実につかえたい。貧しいけれど、心からなるこの献げ物を受けてくれ。」という表現からは、青年の心に対する語り手の賛美の気持ちがうかがえる。"obsequious" には、葬儀において死者に捧げる思いという意味があり、青年の死を予示する働きがあるという捉え方もあるが（Dunkan-Jones 1997, p. 125 参照）、Schmidt (1976, Vol II, p. 789) はこの語の 2 つの意味、1) zealous, officious, devoted と 2) Especially zealous with respect to what is due to the deceased; mourning のうち前者の例として Sonnet 125 番を挙げている。ここでは Schmidt に従い、「生きている」青年への忠実で敬虔な気持ちを表す表現として解したい。なお、"obsequious" という語は上述した 31 番 5 行目にも見えるが、この語はソネット集全体の中で、31 番と 125 番のこの 2 箇所にしか用いられていない。[14] 31 番では、"obsequious" は死者を悼む涙の形容辞であったが、その死者たちの姿を宿す青年については、語り手は「墓」という喩えを用いながら、愛する死者たちがそこで「生きている」（9 行目）と捉えていた。ソネット集が描く青年への愛の最終段階を予兆する表現であったということが、125 番と読み比べることによってわかる。この "obsequious" の呼応から、遠く 31 番に示された、語り手が人生の中で何度も経験してきた religious

[14] 31 番と 125 番の "obsequious" の呼応については渡辺秀樹名誉教授より指摘いただいた。感謝申し上げます。

love が、125 番に至って最終的に青年の心に向かって集中的に注がれている様子がうかがえる。

10 行目の “oblation” については、Burrow ed. (2002, p. 630) が “ritual offering, often to God” という解釈を示している。語り手は、この詩集で随所に見せていた青年の外見の美への注目という志向性を捨て、神に向き合うように青年の心に向き合い、自らの誠を捧げようとしていることがわかる。

以上、神への信仰の観点から青年と向き合う語り手のメタファーについて表 7 にまとめる。

表 7 〈神への信仰〉の観点から語り手と青年の関係を捉えるメタファー

	31 番	**108 番**	**110 番**	**125 番**
語り手	墓に参り哀悼の涙を流す人	日毎祈りを捧げる信仰者	だんだら染めの道化	信仰者
青年	死んだ友人たちを納めた墓	神	神	神

８．結び：*Sonnets* の構成と関係性のメタファー

以上、本稿では、シェイクスピアの *Sonnets* の、青年への愛を描いた 1 番から 126 番までで、語り手と青年という 2 人の登場人物の両方を比喩による描写の対象とした最初の詩である 14 番以降、2 人の関係性がどのようなメタファーで捉えられ、語られているかを観察してきた。

本プロジェクト報告書の渡辺秀樹名誉教授の論文では、*Sonnets* の詩篇の集積を連続して読むことで、単独で読んだのでは浮かび上がらない意味内容が得られることが論じられている。本稿で考察した語り手と青年の関係性のメタファーに関しても、詩を単独ではなく連作として読むことにより、2 人の関係性の変化が、用いられるメタファーの変化の観点から明らかになる。*Sonnets* に収められた詩を順次読み進める中で、2 人の関係性が変化していく様を考える際に、Gollancz, ed. (1919, pp. xxvii-xxix) の分析が有益である[15]。Gollancz は *Sonnets* 全 154 篇を大きく 3 つに分類する（A. THE BETTER ANGEL（良き天使）1 番～126 番、B. THE WORSER SPIRIT（悪しき霊）127 番～152 番、C. LOVE’S FIRE（愛の炎）153 番～154 番）。A の「良き天使」すなわち青年をテーマとした詩群を 3 つに下位分類し（I. LOVE’S ADORATION（愛の礼賛）1 番～26 番、II. LOVE’S TRIALS（愛の試練）27 番～99 番、III. LOVE’S TRIUMPH（愛の勝利）100 番～126 番）、この下位分類の 2 番目、愛の試練を描いた 27 番～99 番の詩群については、さらに 6 つに下位分類する。(a) The bitterness of absence（会えない辛さ）27 番～32 番、(b) Love’s first disillusioning（愛の初めての幻滅）33 番～42 番、(c) Love’s longings and prophetic fears（愛の切望と不吉な予感）43 番～55 番、(d) Love’s growing distrust and melancholy（愛の募る疑惑と憂鬱）56 番～75 番、(e) Love’s jealousy（愛のライバルへの警戒心）[16] 76 番～96 番、(f) Love’s farewell tribute（離別中の愛の賛辞）97 番～99 番である。この分類に基づいて *Sonnets* の構成を示すと図 1 のようになる。

図 1 シェイクスピアの *Sonnets* の構成（Gollancz, ed. 1919, pp. xxvii-xxix に基づき作成）

<table>
<tr><td colspan="3">A. THE BETTER ANGEL（良き天使）</td><td>1 番～126 番</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">I. LOVE’S ADORATION（愛の礼賛）</td><td>1 番～26 番</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">II. LOVE’S TRIALS（愛の試練）</td><td>27 番～99 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(a) The bitterness of absence（会えない辛さ）</td><td>27 番～32 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(b) Love’s first disillusioning（愛の初めての幻滅）</td><td>33 番～42 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(c) Love’s longings and prophetic fears（愛の切望と不吉な予感）</td><td>43 番～55 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(d) Love’s growing distrust and melancholy（愛の募る疑惑と憂鬱）</td><td>56 番～75 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(e) Love’s jealousy（愛のライバルへの警戒心）</td><td>76 番～96 番</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(f) Love’s farewell tribute（離別中の愛の賛辞）</td><td>97 番～99 番</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">III. LOVE’S TRIUMPH（愛の勝利）</td><td>100 番～126 番</td></tr>
<tr><td colspan="4">B. THE WORSER SPIRIT（悪しき霊） 127 番～152 番</td></tr>
<tr><td colspan="4">C. LOVE’S FIRE（愛の炎） 153 番～154 番</td></tr>
</table>

[15] Gollancz, ed. (1919) による *Sonnets* の構成の分析については渡辺秀樹名誉教授にご教示いただいた。

[16] Gollancz の分類で 76 番から 96 番までの詩群に与えられた名称 “Love’s jealousy” を訳すにあたり、これらの詩群が歌う詩想は「嫉妬」という日本語が暗示する妬みや悋気とは異なり、ライバル詩人に対する凄まじいまでの警戒心であることから、「愛のライバルへの警戒心」という訳語を当てた。

本稿で観察した語り手と青年の関係性についてのメタファーが表れた詩の配置について、Gollancz による 1 番〜126 番の分類に沿って整理すると、図 2 のようになる。

図 2　語り手と青年の関係性についてのメタファーのテーマと詩の配置

青年との純粋な愛を歌い、2 人の幸せな関係性を描いた「愛の礼賛」の段階、および「会えない辛さ」の段階を描く 32 番までの詩群において、本稿で観察した 6 種類のメタファーのテーマのうちの 5 種類が登場している。そのうち〈天体との関わり〉、〈植物の命の継続の試み〉、〈君主に仕える下僕〉の 3 種は、「愛の礼賛」の段階で各 1 篇の詩に見られる（それぞれ 14 番、15 番、26 番）。〈財産/絵画作品の所有と管理〉のテーマでは、青年を絵画と見なす詩が「愛の礼賛」の段階で、財産と見なす詩が「会えない辛さ」の段階で 1 篇ずつ現れる（それぞれ 24 番、30 番）。〈神への信仰〉のメタファーが登場するのは「会えない辛さ」の段階で、1 篇の詩（31 番）に見られる（27 番および 29 番は、真の信仰心を表すものではないと判断し（第 7 節参照）、数に入れていない）。恋愛の序盤である「愛の礼賛」および「会えない辛さ」の段階において、愛する人との関係性のメタファーの大まかなラインナップが示されていると言える。

「会えない辛さ」を描く詩群では、〈天体との関わり〉から 2 人の関係性を描くメタファーが集中的に表れることに注意したい。会えないからこそひたむきに相手を想う語り手の心情が、天体の神秘的な力への畏敬の念に喩えて語られる（27 番、28 番、29 番）。語り手と青年の物理的距離と、光は届くが遠くに存在する天体との距離感が対応関係をなしているとも考えられる。

ところが、33 番以降は一転、語り手の青年への愛は新たな局面を見せ始める。青年の裏切りを受け、「初めての幻滅」を覚える語り手は、青年を〈翳る太陽〉や〈罪人〉に喩える。このメタファーは、「愛の礼賛」や「会えない辛さ」の段階には存在しなかった発想である。相手への愛情を天体への畏敬の念になぞらえていた直前までの詩群と比べると、喩えの選択に大きな落差があり、そこに語り手の幻滅の大きさがうかがえる（語り手の心情の違いを表すため、図 2 では「初めての幻滅」とそれまでの段階とを区切る線を太線にした）。語り手は自らを〈被害者〉として悲嘆と非難の気持ちを表出しながら、青年の罪を弁護し、許すという複雑な心情を吐露する（33 番、34 番、35 番、40 番）。この〈翳る太陽/罪人への非難と許し〉の態度は、詩集の終盤に近い「ライバルへの警戒心」を表す詩群中の 93 番にも表れる。

青年に対して初めての幻滅を味わった後、それでも「愛を切望し、不吉な予感に怯える」心情を描いた詩群では、〈財産/絵画作品の所有と管理〉をテーマとしたメタファーが集中的に示される（46 番、47 番、48 番、52 番）。戦利品として獲得した絵画、あるいは盗まれる危険のある貴重な財産として青年を描く語り手の発想は、もはや青年との関係が盤石なものとは保証されないという自覚ゆえの不安を反映している。このメタファーは、2 人の関係の次の段階である「募る疑惑と憂鬱」を描く詩群中（65 番、75 番）、さらに「ライバルへの警戒心」の詩群中にも表れる（87 番）。

この *Sonnets* の詩集全体にわたって、青年を〈植物〉、特に〈薔薇〉に喩えるメタファーが頻出するが、それを支えるのは、若く美しいといえども老化や死を免れない青年の脆弱さへの着目である。2 人の関係性という観点からは、〈植物〉たる青年に対して語り手が〈園芸家〉ないし〈香水製造者〉としてそのはかない命を継続させようと試みるという喩えが示される。この〈植物の命の継続の試み〉というテーマは、「愛の礼賛」、「初めての幻滅」、「切望と不吉な予感」の詩群中に 1 つずつ点在している（15 番、37 番、54 番）。

「切望と不吉な予感」の段階を越え、青年に対し「募る疑惑と憂鬱」を覚える新たな段階に入り、〈君主に仕える下僕〉の観点から青年との関係性を捉えるメタファーが集中的に現れる（57 番、58 番、61 番、63 番）。青年との幸福な愛を描いていた序盤に 26 番で一度示された、〈君主〉との

主従関係というメタファー的発想に、自由奔放な君主と彼を待つことしかできない奴隷という新たな関係性が加わり、青年を愛するがゆえの苦しみが表現される。しかしその苦しみも、63 番では、時の神に対抗して脆弱な君主を守ろうとする護衛としての矜持に昇華される。

このように、青年を愛する語り手が味わう喜びや悲しみ、苦しみ、恐れ、相手を守り抜こうとする矜持といった感情の諸相は、様々なメタファーにより表現される。詩集を読み進める読者は、詩の進行に伴い、複数のメタファー的発想が絡まり合うように現れる様を味わう。それはそのまま、人間が時間の経過の中で、もつれ合う感情を味わいながら愛を育んでいく様を再現している。

そうしたメタファーのもつれの後、「離別中の賛辞」を歌う 97 番から 99 番の詩群を経て、[17]「愛の勝利」を描く最終盤、青年への愛は〈神への信仰〉と同等の気持ちに変わる。このメタファーは序盤の 31 番、敬虔な祈りの対象として青年を描いた詩に一度見られたが、その後まったく影をひそめたまま推移し、ここに来てやっと再登場する。青年を〈天体〉に喩えて賛美していたかと思えば、その翳りを非難の対象とし、時に青年を〈罪人〉扱いし、時に青年を美しくもはかない〈植物〉に喩え、あるいは自分が所有し管理する〈財宝〉扱いし、また自分を理不尽に支配する〈君主〉に喩えていた語り手にとって、青年の捉え方が大幅に昇格したことが〈神〉のメタファーからはうかがえる。振り返れば序盤でも、天体に喩えることで語り手は青年を神格化しているように一見思えたが、それは青年の若々しい美しさへの賛美に過ぎず、真の意味での信仰心ではなかった。最終盤の 125 番に示された、青年を〈神〉と崇め、その外観ではなくその心に対する信仰心の観点から自らの愛を捉えようとする姿勢からは、若年の、あるいは恋愛関係の初期段階の感情からは見つけ難い、老成された愛のひとつの理想を見て取ることができる。

参考文献

Burrow, Colin, ed. (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.

Booth, Stephen, ed. (1977) *Shakespeare's Sonnets*. New Haven: Yale University Press.

Duncan-Jones, Katherine, ed. (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.

Furnivall, Frederick James, ed. (1882) *Phillip Stubbes's Anatomy of the Abuses in England in Shakspere's Youth, A.D. 1583*. London : Published for the New Shakspere Society, by N. Trübner & Co.

Gollancz, Israel, ed. (1919) *Shakespeare's Sonnets*. London: J. M. Dent and Sons.

Ingram, W. G. and Redpath, Theodore, eds. (1964) *Shakespeare's Sonnets.* London: Hodder and Stoughton.

川西進（編注）（1971）*Shakespeare's Sonnets.* 東京：鶴見書店.

Knobel, E. B. (1916) "Astronomy and Astrology" in *Shakespeare's England: and Account of the Life and Manners of his Age*, Vol. I, ed. by Oxford University Press, Oxford: Clarendon Press, pp. 446-461.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

大場建治（編注訳）（2018）『ソネット詩集』（研究社シェイクスピア選集別巻）東京：研究社.

大森文子（2018a）「喜びと悲しみのメタファー : Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.

------（2018b）「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1 』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104.

------（2021）「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.

------（2022）「時のメタファーとシェイクスピア」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、17-29.

------（2023）「鏡と水仙 ： シェイクスピアの *Sonnets* における隠されたレトリック」『レトリックと文法（言語文化共同研究プロジェクト 2022）』（大森文子編）大阪大学大学院人文学研究科、

[17] 「離別中の賛辞」を歌う詩群 97～99 番では 2 人の関係性を示すメタファーは現れない。これらの詩は「夏や秋（97 番）や春（98 番）も冬のように思えた」や「花々を見るとそれらは君から香りや色を盗んだように思えた（99 番）」といった内容で、青年と離れて暮らしていた時期の寂しさにかこつけて青年を賛美するものである。

1-14.
パノフスキー、エルヴィン（著）、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏（訳）（2002）『イコノロジー研究』（上）東京：筑摩書房.
Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.
柴田稔彦（編）（2004）『対訳 シェイクスピア詩集』（岩波文庫）東京：岩波書店.
高松雄一（訳）（1986）『ソネット集（シェイクスピア作）』（岩波文庫）東京：岩波書店.
渡辺秀樹（2019）「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.
------（2021）「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考： “when〜then〜” の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.
------（2022）「Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション：英国 16〜17 世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考」『英語のレトリック・日本語のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2021）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、3-15.
------（2024）「英詩における主題提示音分散 (hypogram) 再考：Herrick と Wordsworth、Shakespeare と Blake の比較から」『こちら側とあちら側のレトリック―メタファー・翻訳・認知―（言語文化共同研究プロジェクト 2023）』（村上スミス・アンドリュー編）大阪大学大学院言語文化研究科、15-23.
Wilson, John Dover, ed. (1966) *The Sonnets* (*The New Shakespeare*). Cambridge: Cambridge University Press.

（電子資料）
OpenSourceShakespeare, George Mason University, 2003-2025.（https://www.opensourceshakespeare.org/）
The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2025.（https://www.oed.com/）